

# 巨龍の光と影

## 政治、経済、安全保障、日中関係…

### 「岐路に立つ中国・日本はどよう向き合うか」

政策科学専修 シンポジウム

日本経済の争点・論点を挙げ、ディスカッションを展開する大学院経済学研究所「政策科学専修」の第9回シンポジウムが10月30日、神田キャンパスで開かれた。

シンポジウムの焦点は中国。「岐路に立つ中国・日本はどよう向き合うか」をテーマに掲げた。鄧小平の「共産党支配による改革・開放政策」開始から30年。大国としてダイナミックな成長を

遂げ国際社会への仲間入りを果たしつつある中国は、同時にさまざまな矛盾や問題を抱えている。基調報告は、防衛大学校長の五百旗頭真氏(政治史、外交史)。日中関係史を概括、良好な関係を保つ必要性を強調し、パネルディスカッションにつなげた。会場を埋めた140人の聴衆は熱い論議に聴き入った。

夫首相でようやく改善。かつて日本の国連常任理事国入りで反対した中国が「日本の国連での大きな役割を支持する」と約束した。洞爺湖サミット(主要国首脳会議)では、胡錦

### 基調報告 五百旗頭真 防衛大学校長

五百旗頭氏は「日本が国際社会を歩む上で最も重要な大事にしなければならぬのは、98年の金大中大統領の来日で韓国との関係の歴史をたどり、問題点を探った。第二次世界大戦をめぐる日本とアジアとの関係について言及。1977

年、「福田ドクトリン」以降、東南アジア諸国と関係改善は進まなかった。歴史認識について日本を執拗に批判してきた当時の江沢民国家主席、「靖国参拝」により中国側の態度を硬化させた小泉純一郎首相。この時代に日

## 日米中の関係大切に



五百旗頭真氏

中関係は冷え切った。胡耀邦時代、「日中青年友好交流を経験し、対日関係改善の機会を求めた」現在の胡錦濤国家主席、北京五輪開催にあたって同主席に激励の親書を送った前任の福田康

夫首相でようやく改善。かつて日本の国連常任理事国入りで反対した中国が「日本の国連での大きな役割を支持する」と約束した。洞爺湖サミット(主要国首脳会議)では、胡錦濤

日本は武力に頼らざるに。日中戦争について、小島明氏は「日中が対立する中で武力による人権弾圧を起さないことが不可欠だ。それを国際社会が強く求める必要がある」と訴えた。

飯島さんの専門は日本文学。大東文化大学文学部時代から古典文学のほか民俗学や文化人類学にも興味を持った。大学院では「古事記」を研究。現在は本学の大

### パネルディスカッション

パネルディスカッションは、アジア経済、開発経済学が専門の大橋英夫教授のコーディネートにより進められた。「北京五輪を終えた中国の政治、経済、安全保障などすべてを考えると」と次の4点を提起、4人のパネリストが答えた。

望③経済成長の持続性④軍事費が世界3位となる中国の安全保障。小島氏は「中国は阿片戦争以降の『失われた1世紀半』を経て大国として

台頭ではなく、平和的発展である。一方でグローバル社会にインパクトを与え、さまざまな摩擦をもたらしているのも事実」とし、中国の進出で変化する世界経済レジームそのもの立て直しの

は見えない「問題」も肥大化しており、手当てが必要になってくる。今後必要にならない問題は、

「中国は覇権国家を目指しているのではないか」。これらの問いに佐島教授は「中国が完全な統一を達成し、中国共産党がその役割を終える時にパラダイムは転換するのではないか」と国内の問題点を追求する政治メカニズムが確立されていない。一刻も早く民主化を進め、

## カギ握る「人治」↓「法治」

## 日中は相互補完を

て再度の台頭を遂げ、世界秩序の形成、維持に不可欠な存在として躍り出た。「中国は肥大化しているが光と影があり、外に

治や制度民主化の確立である。民主化には透明性が必要であり、中国は尊敬される責任ある大国を目指さなければならぬ」と語った。

権に期待を寄せた。地域安全保障が専門の佐島教授は「軍事力の透明性が中国にとって重要な」と語り、それがなぜかを立証した。現状では

「中国の軍事力は脅威であり、抑止できない存在である」とし、「脅威」と共存するシステムとして

- パネリスト**
- ▽小島明氏 (日本経済研究センター特別顧問)
  - ▽天兒慧氏 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)
  - ▽関志雄氏 (香港生まれ、林野村資本市場研究所シニアフェロー)
  - ▽佐島直子氏 (本学経済学部教授)
  - ▽大橋英夫氏 (本学経済学部教授) コーディネーター

「共通安全保障と協調的安全保障がポイント」と語った。また「中国の安定的な経済成長、世界との共存には、軍事的な緊張緩和、そして中国国内で武力による人権弾圧を起さないことが不可欠だ。それを国際社会が強く求める必要がある」と訴えた。



▲歌い手3兄弟(右の3人)を取材する飯島さん(左)と通訳の女性=8月、城関鎮で

### 歌掛け

## 現地の歌い手を取材

「古事記」に見られる歌掛けを研究することが出発点だったと紹介された。西安と紫陽県を結ぶ高速道路が2年後に完成するなど、城関鎮の周辺は

「古事記」に見られる歌掛けを研究することが出発点だったと紹介された。西安と紫陽県を結ぶ高速道路が2年後に完成するなど、城関鎮の周辺は

2006年には国際交流協定校の西北大学に長期留学。文献資料からの解釈だけでなく、少数民族による歌掛け文化が残る雲南省などでその様子を目にするうちに、西北大学代につなげていく橋渡し

省、その紫陽県での漢民族による歌掛けに着目した。紫陽県での調査は今回が2年ぶり3回目。成田から西安、安康市を経由し紫陽県まで、飛行機と列車を乗り継ぎ3日間もかかる。安康市から、少し詰めめの車で1時間半、漢江の豊かな水に恵まれ、緑茶やマンダリンの畑が広がる紫陽県に到着する。